

小玉香津子教授の定年ご退職によせて

小笠原 昭 彦

名古屋市立大学の初代看護学部長である小玉香津子教授には、平成14年度末をもって、定年により退職されることとなりました。先生は、きっと「いい加減くたびれました」とおっしゃることでしょうが、私自身は、まだまだ先生にご指導を仰ぎたいことも多く、定年という制度を恨みたくなる気もしています。

先生は、平成10年4月に日本赤十字看護大学より、市立大学事務局総務課内におかれていました「看護学部（仮称）設置準備室」に着任され、「名古屋市立大学看護学部（仮称）設立指導委員」として、看護学部発足の準備にあたられました。平成11年4月の看護学部発足以降は、初代の看護学部長として、4年間にわたり、学部運営を軌道に乗せるべく、教職員の先頭に立って言葉に尽くせないほどのご尽力を賜りました。さらに、大学院看護学研究科設置の準備にも奮闘されました。この間の先生のお仕事ぶりは、まさに、常々おっしゃる、「そうありたい自分に現実の自分を限りなく近づける努力」そのものであったと言えます。

先生は、昭和34年3月に、当時の東京大学医学部衛生看護学科（現在の健康科学・看護学科）をご卒業になりました。先生はその第3回生ですが、看護学に志された動機を、「新しい学科ができたから、何かおもしろいことでもあるかと思って入学しました」と、あるとき私におっしゃったことを記憶しています。爾来、40年以上にわたり、看護学の教育・研究に携わってこられたわけですから、看護学には先生を魅了してやまない何かがあるのだろうと想像しております。

東京大学ご卒業後は、医学部附属病院研究生、衛生看護学科基礎看護学講座技術員、同研究生（基礎看護学講座）を歴任されるとともに、昭和42年4月から59年10月まで神奈川県立衛生短期大学非常勤講師として、基礎看護学を講じられました。また、昭和52年4月から昭和56年12月までは、日本看護協会国際室嘱託として、国際関係の文書を担当されています。昭和57年1月から昭和59年10月までは、日本看護協会出版会で、雑誌「看護」の編集長、編集顧問を務められました。

昭和59年11月から平成3年3月までは、神奈川県立衛生短期大学の基礎看護学の教授、引き続き、平成3年4月から平成10年3月まで、日本赤十字看護大学で基礎看護学の教授を務められました。日本赤十字看護大学では、

平成5年4月からは大学院看護学研究科修士課程を、また平成7年4月からは博士課程も担当されました。この間、東京大学医学部ならびに大学院医学系研究科非常勤講師（基礎看護学、地域看護学をご担当）、島根県立看護短期大学客員教授も歴任されました。

さて、小玉先生の研究業績と言え、何をさしおいてもフロレンス・ナイチンゲールの著作研究をあげなければなりません。ナイチンゲール著作集全3巻の翻訳（現代社）では、第14回日本翻訳文化賞を受賞しておられます。先生は、ナイチンゲールの著作や書簡を単に文献学的に研究されただけではなく、イギリス、ウクライナのクリミア半島、ドイツ、エジプト、ギリシャなどにナイチンゲールの足跡を実際にたどりつつ、いわば実証的に論考しておられます。また、現代看護の第二の起源ともなったヴァージニア・ヘンダーソンの著作の翻訳、研究のご業績も多数に上ります。さらに、患者―看護婦間のユーモアの研究、特養ホーム入所者の活動状況など、先生の幅広いご関心が窺える研究も多数あります。これらの他、看護学概論、基礎看護学など看護基礎教育の多数に上るテキストの編輯、執筆、生活行動援助の文献集の編輯、「内科―外科の看護Ⅰ～Ⅲ」「性を知る」「いま改めて看護とは」「看護はいま、ANAの社会政策声明」など多数の翻訳を手がけておられます。先生のお書きになったものは、その格調の高さとともに、用いられた言葉が十分に吟味されており、人文学の研究者である筆者にとっても学ぶべきところが多々あります。

学外におかれましては、フロレンス・ナイチンゲール研究学会、日本看護科学学会、日本看護歴史学会、日本保健医療社会学会などの各会員でいらっしゃいます。このうち、フロレンス・ナイチンゲール研究学会では、昭和55年10月以来理事と副会長をなさり、発表も精力的に続けておられます。日本看護科学学会では昭和62年1月から平成4年12月まで、評議員、理事、「日本看護科学会誌」編集委員長を、また、平成8年1月から13年12月までは評議員、監事を、それぞれ務められました。これらの他にも、日本看護歴史学会幹事、日本保健医療社会学会理事、日本看護教育学会評議員、赤十字看護学会理事、同評議員など多数の要職を歴任されました。さらに、「インターナショナル・ナーシング・レビュー」（日本版）の編集委員もなさっています。このように国内の学会の

小玉香津子教授の定年ご退職によせて

みならず、平成8年10月からは Nursing Ethics の editorial board を務められるなど、国際的にもご活躍のことは皆様、よくご存じのことと思います。

小玉先生とご一緒させていただいた4年間に、さまざまな先生の姿に接してきました。時には、私自身、先生と考えが異なる部分もあったり、先生のご提案に反対を申し上げたこともありました。しかしながら、常々敬服させられたことがあります。その一つは、「常に問題の本質を問う」という、先生の学問、学部運営などに共通するスタイルでした。先生がお書きになった「ナイチンゲール」(清水書院、人と思想No.155)を拝読しますと、この「常に問題の本質を問う」という生き方は、ナイチンゲールのそれにも通ずるものがあるように思われます。先生の学問は、机上のものでは決してなく、生きた、身に付いた学問であると言えるでしょう。また、もう一つ、私などではとても先生の足下にも及ばないと思うことは、「視点の高さ」です。これは、視野の広さとはまた異なるものです。高いところから現象や問題を見ていращるが故に、問題の本質が捉えられるのではないかと考えさせられたものです。このような意味で、先生は研究者というよりも、学者と申し上げるのにふさわしい、と私は思っています。

名古屋での先生は、あまりにもご多用でした。看護学部棟2階の研究室は、週日はいつも、他のご用がない限りは、夜9時前後まで明かりが灯っていました。まだまだ、われわれ後進にご叱正をお願いしたいところではありますが、大学の定年規程を、これまで長年にわたり蓄えた「サバティカル満期」と読み替えていただき、ご自身のための時間も楽しんでいただきたいものです。とくに、先生のお好きな植物との対話の時間もゆっくりお取りいただきたいと願っています。

最後に、先生のご指導に改めて深い感謝の意を表し、ますますのご健康をお祈り申し上げます。